浪枕江の島新語二編
文保田彦作級
延壽堂梓
楊洲周延画
下
中
上

楊弓の図
上

A480
1

浪枕

江の鳴

新撰

武藤

上之巻

久保田 彦作綴

揚洲 周重画

延壽堂梓

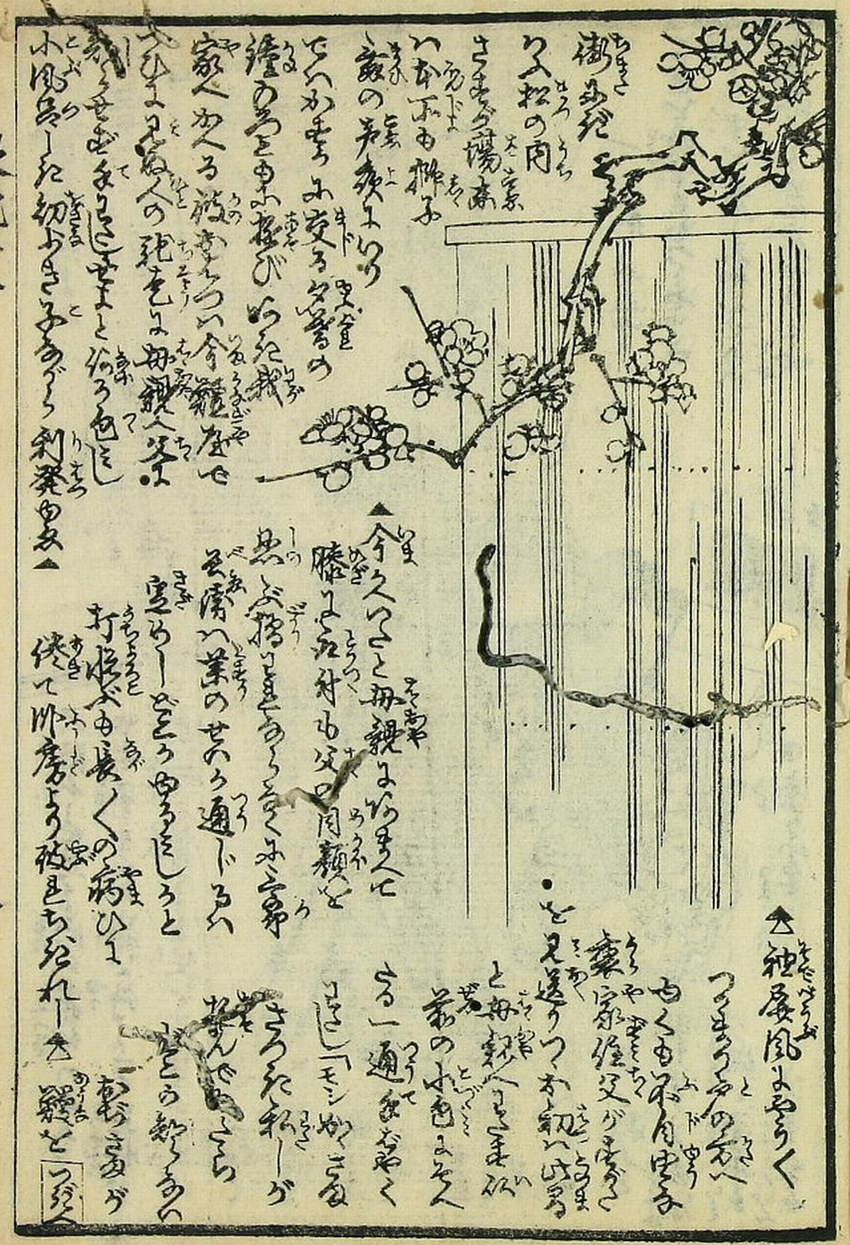
48-8205

五月雨は近き窓下の机は。本文歌舞伎新報のその脚色の江の島新語と。此せつ硯の干瀉とかうし。彼曾我殿原は彷彿とする。貧乏屋敷の鬼王おつね。浮世と辛く禿筆のてらる久保田ぐ拾ふ貝売。その蛤〻屋氣樓も吹ざーう孤ね虚を交へぷんでも三編三杯酢ぢ搾らんとまる此一編料理の素より加減酢さん。いと鳥貝のうつくしけれども。初編を讀でモウ澤山。決して再進い致さねと。看客定めし思ー召さんが。其篇を一番おつとつん。猶お求めを下さらべ。有ぐ茄子のお仕着ぎうよ。朝比奈めうて希ふは。曾我の主個と用人の。二役兼ー貧士族

久保田ひとさら記

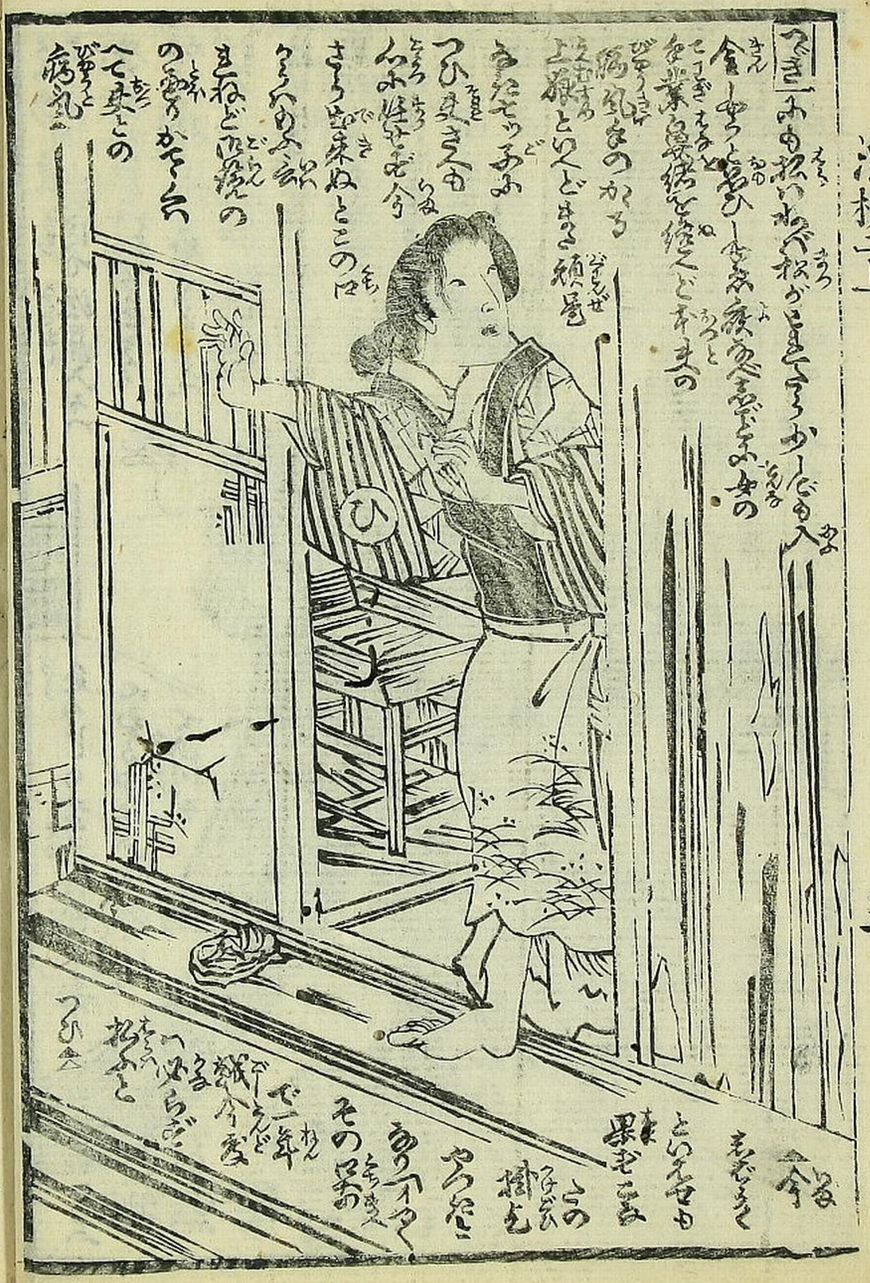
鳥居清満筆
二代目團十郎の妻
俳号翠扇と云
山崎太夫
隠居して常閑と云

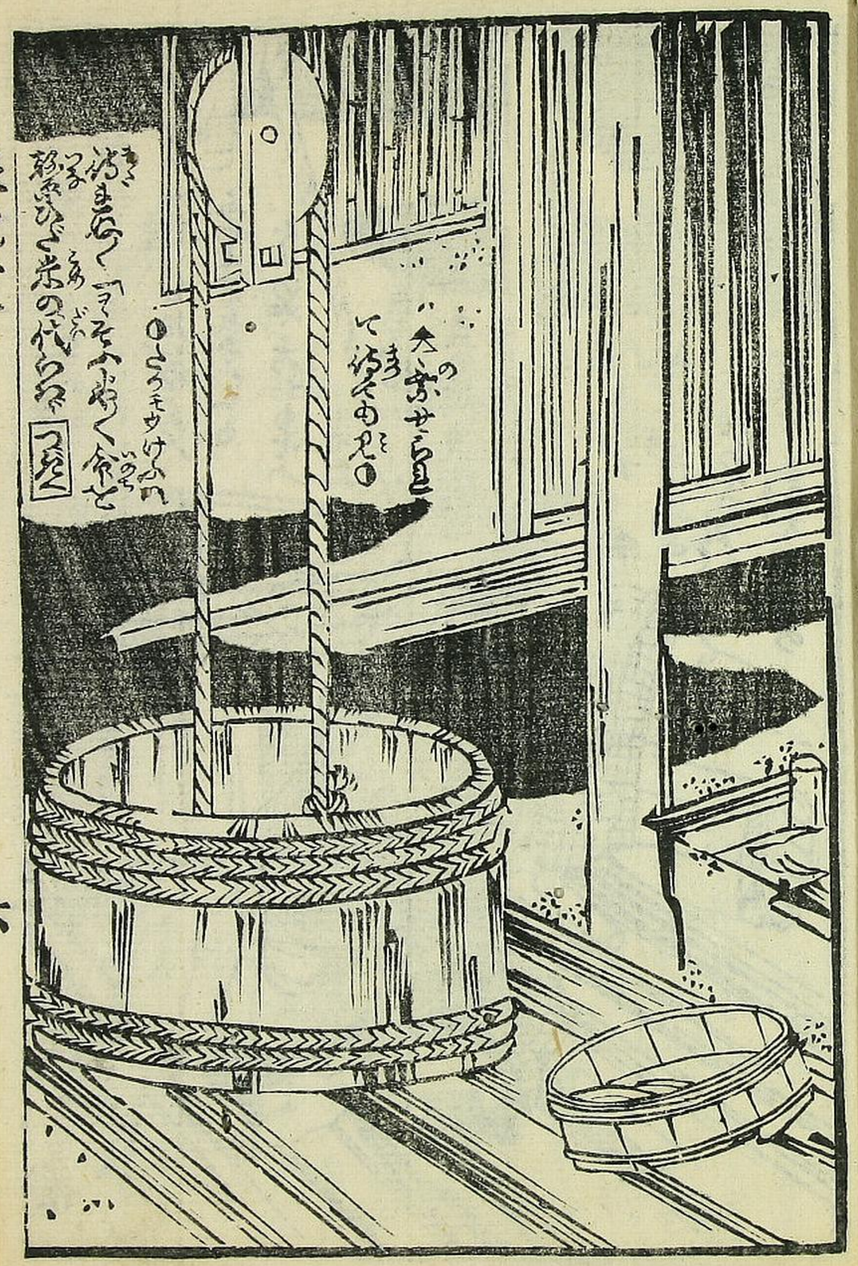
老女宮路



つゞき
三

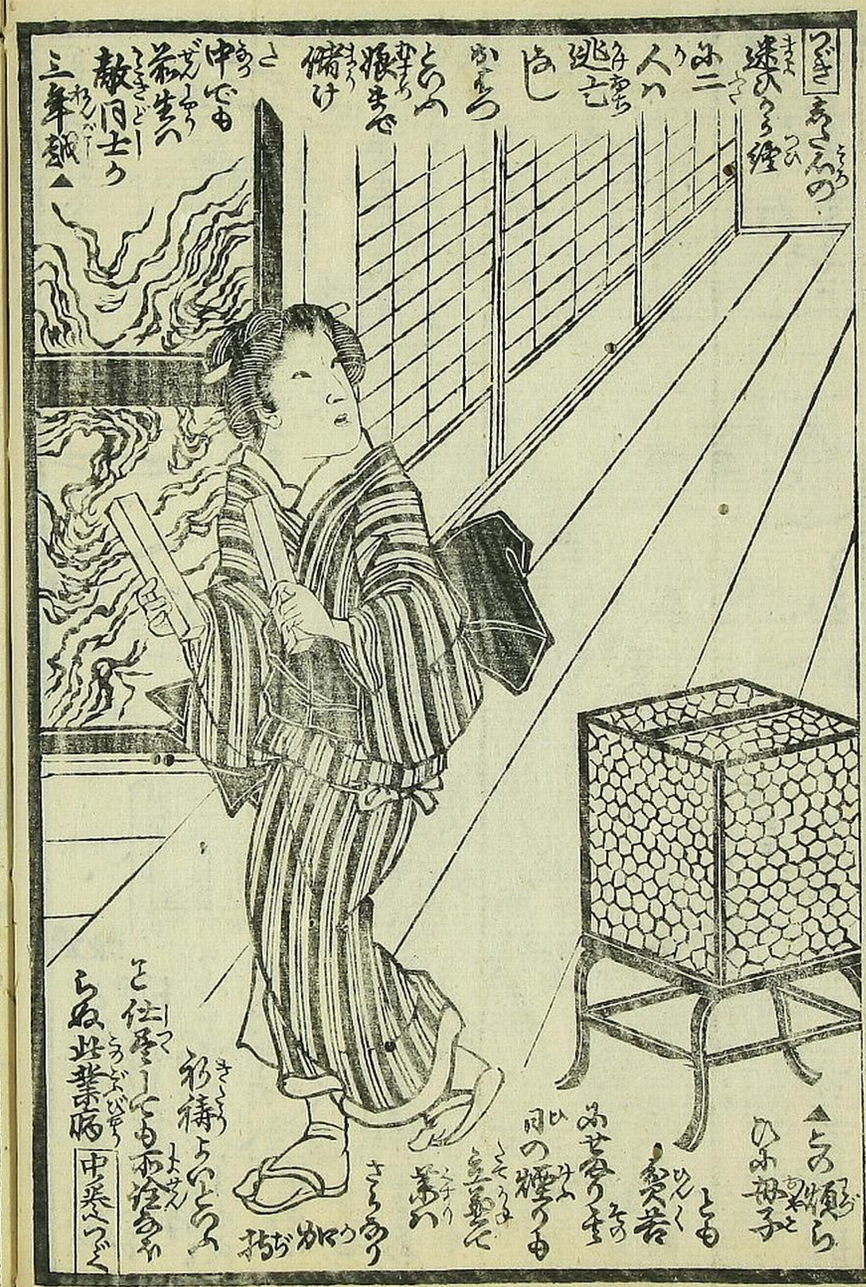
四





つゞき
利ごを
ひ
た
兵

つづき
下馬



小倉山 青樹榮 昔日新話五編 泉竜亭是正作 櫻齋房種画 全

算法教授書 全

鼠袴甲子真聞三編 泉竜亭是正作 櫻齋房種画

人民必携交際義務 同

延壽百人一首 全

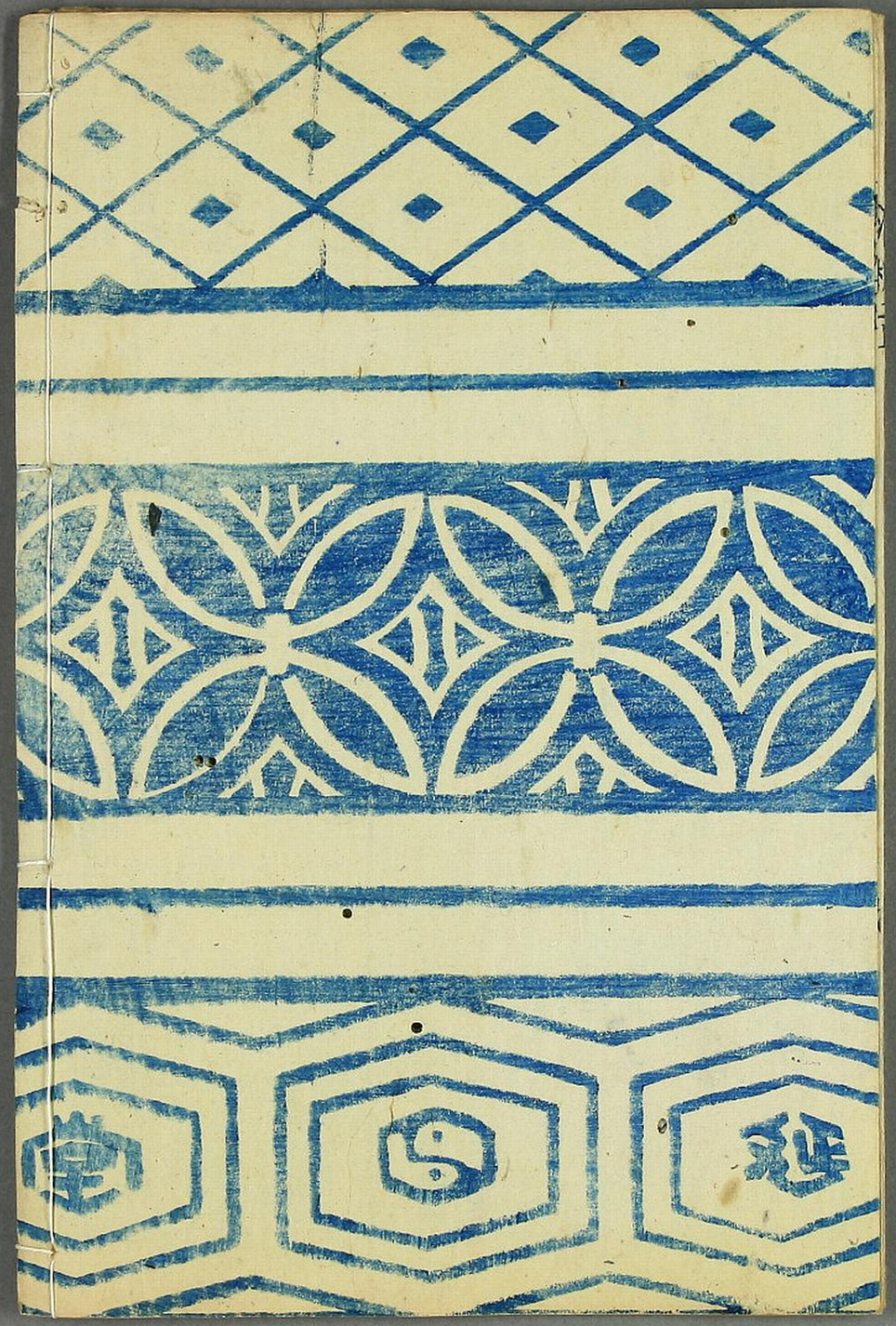
大日本海陸全圖 銅版 全

白縫物譚 豊國画
故人種貞稿種彦作
京板菊壽堂五人為今日之新図社にて後編を出板するの帳ゆゑ依て同氏の名を抹消し一房を入れつゝ出板也看官方陸續ゆ求メと仕て幸ふ
六十四編出板 板元彫白

小倉山 青樹榮 昔日新話五編 泉竜亭是正作 櫻齋房種画

地本錦繪問屋 東京日本橋通三丁目十二番地 延壽堂 小林 丸屋鉄次郎版元

010190516771



浪枕江の島新語二編
久保田彦作綴

上の巻よりつゞく 是につけても邑
主の心の鬼が発起し七條
縁をまつ三郎兵衛いうちに
参詣にせまるべしと元の
夫と悪助へ此因縁ごろを
通じるにも是継今の
黄金やをわけたる此
かまをよらもだましかつさ
なと二おひさぐ鍬髪ひつきん人
因縁よまきる其の力引よせ
らまで女房おみんとゆく
帰るか●傍は尊刀が父の手へ
まがりて父さん悪太郎さんが▲

▲悪いあらう私しとぶつく
母さんは堪忍して下りや
赤んせとかい偖あがらも
生の母が云ふ綱も丹ふも
うけぶと三郎兵衛は気がう
是「足利十と此縁起を
心切にして首なるとんで浮て
おがんで養くふのをうら菩提
悪助が心を其でかつさのころ
娘あらうとて盃ごしの白丹に
和らかにいがみして思へば悋
●いと嘆がるを以て苦痛
を忘まつると立ておくべが△

△鍬髪むしむとさつと
引よせるかい月はよ十年し
まかわりよしその風情
生爪がう云ふ堕地獄の
餓鬼にも等しき面影
はく乱も乱れし
夫がやうせかひきへ
妻へかのくきん
弟の濡衣よ云
白みも爲ほじゝ
手紙の完名
兎といふへも善
ごあるを

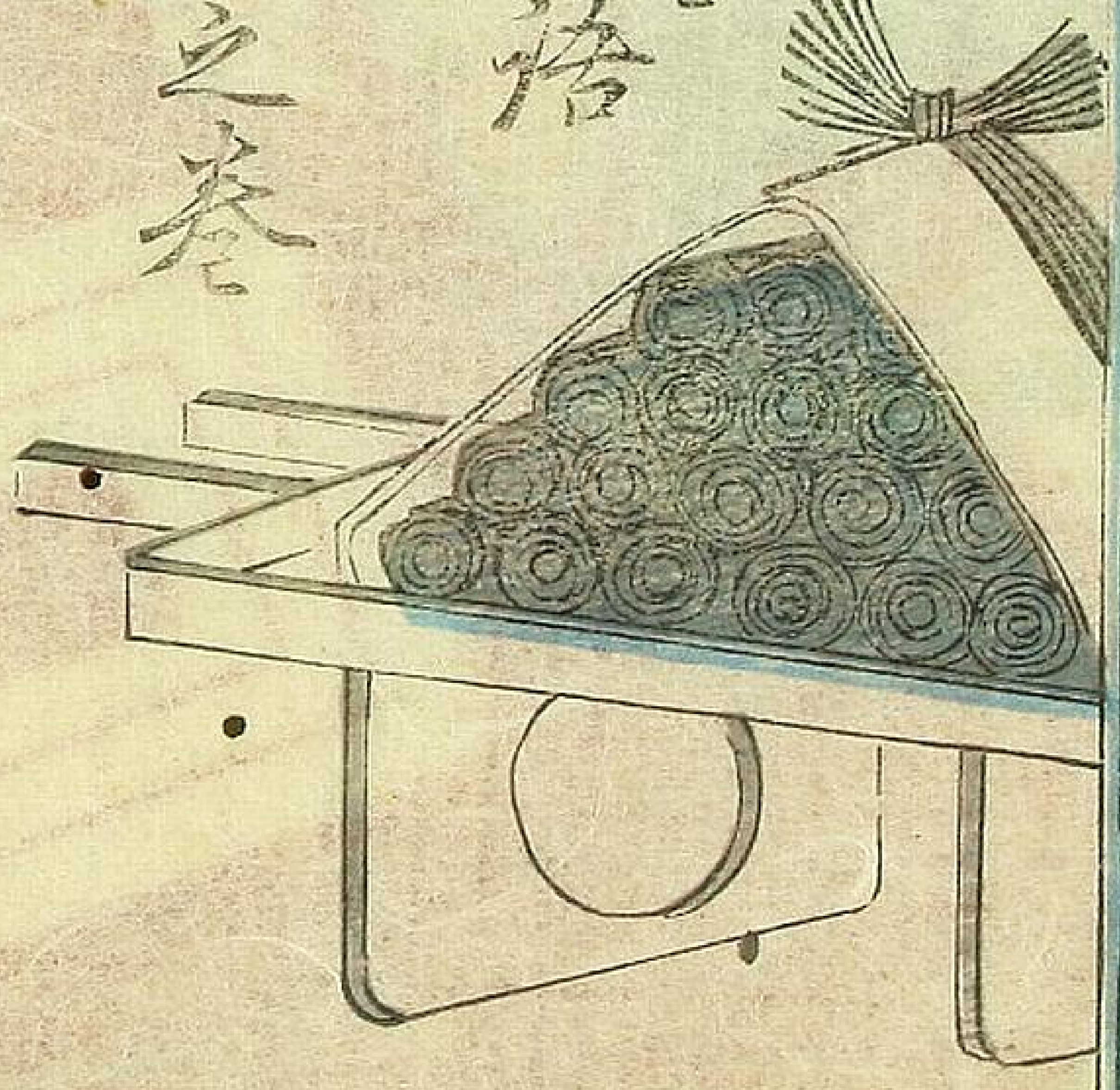
つゞく

浪枕江之島新語

貳編 中之巻

久保田彦作綴

揚洲周延画



延壽堂梓

AX86 2

48-8206

つぎ 芽ぐろ丈と 三弟 岩湯

▲ゑぐる間に鬢の毛逆 だちて攝らぬ足を立 あがく厨の方へ行くが 釣思ひ久破壁のとき ゆきしたる出刃庖丁携 うるほふ手ふとり出げ病 あらけたる腕をふり出

お創頭ひき

●を巡る ありさまは 生ながら

△吾家の ふ浮の 家内

▲声 そぞ立んも えんやとう 一軒家 敷まし一揚 京の像家 夫との縁りを あだらふ来べき 者もなけれが

の一ん百万力衫ひ剋もひよ ろく足おの丑と云つゝおくの 胸先目がけて庖丁突とそんと されど名よおふ 長の頬 らひ足 え未らぞ よろめけとかつて やさかに 突かける 刃物の下をくぐりては怪我 させまじと丈とをかぞふ お久がそれぞ 生まざ▲

将軍家

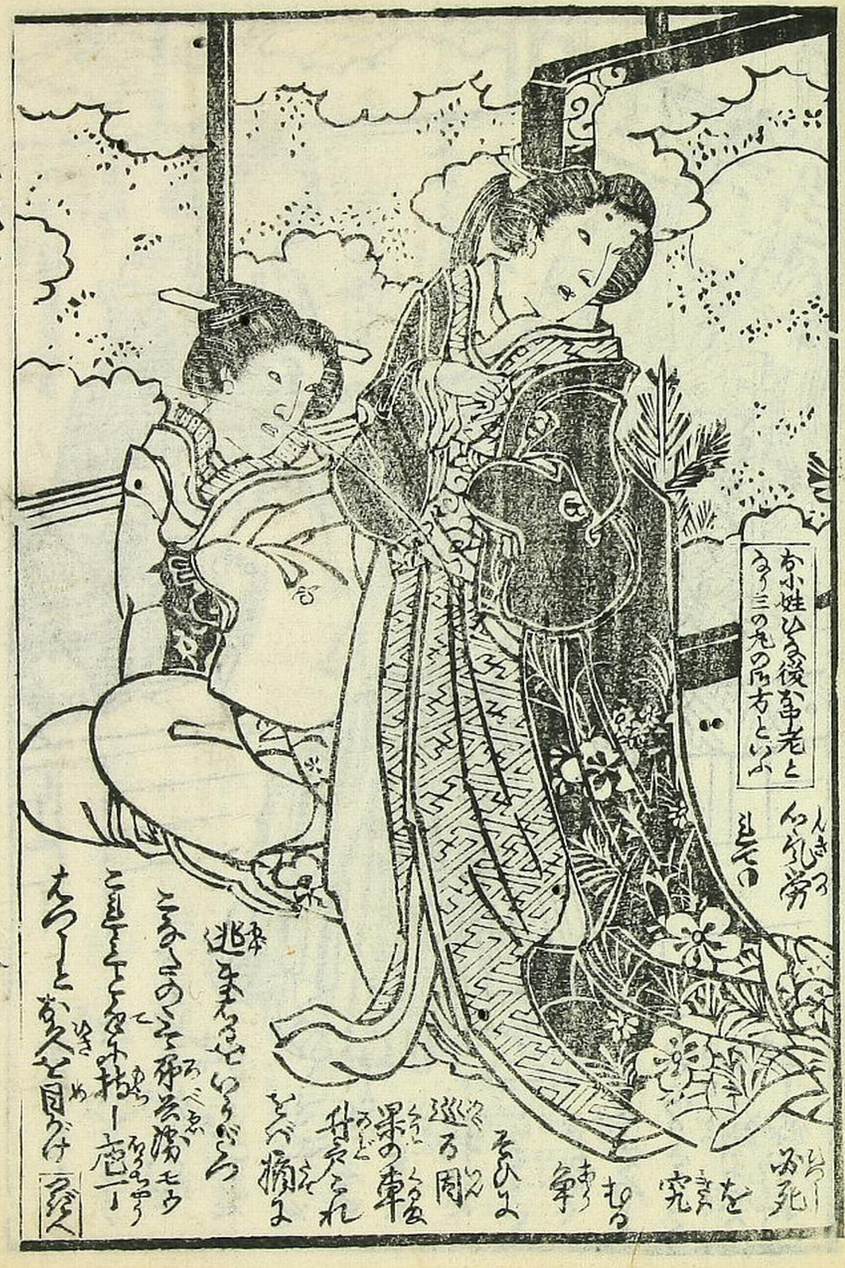
●ある修羅道の地獄 の責も斯やらん三弟 岩湯いよく暴を病中 るがら男も来かへ△

深からく 此場を一 時のがれん と泣 〳〵 おくろを 引抱へ 東を 明て外の 方へ出る いがみてのが 見と証 出せを通

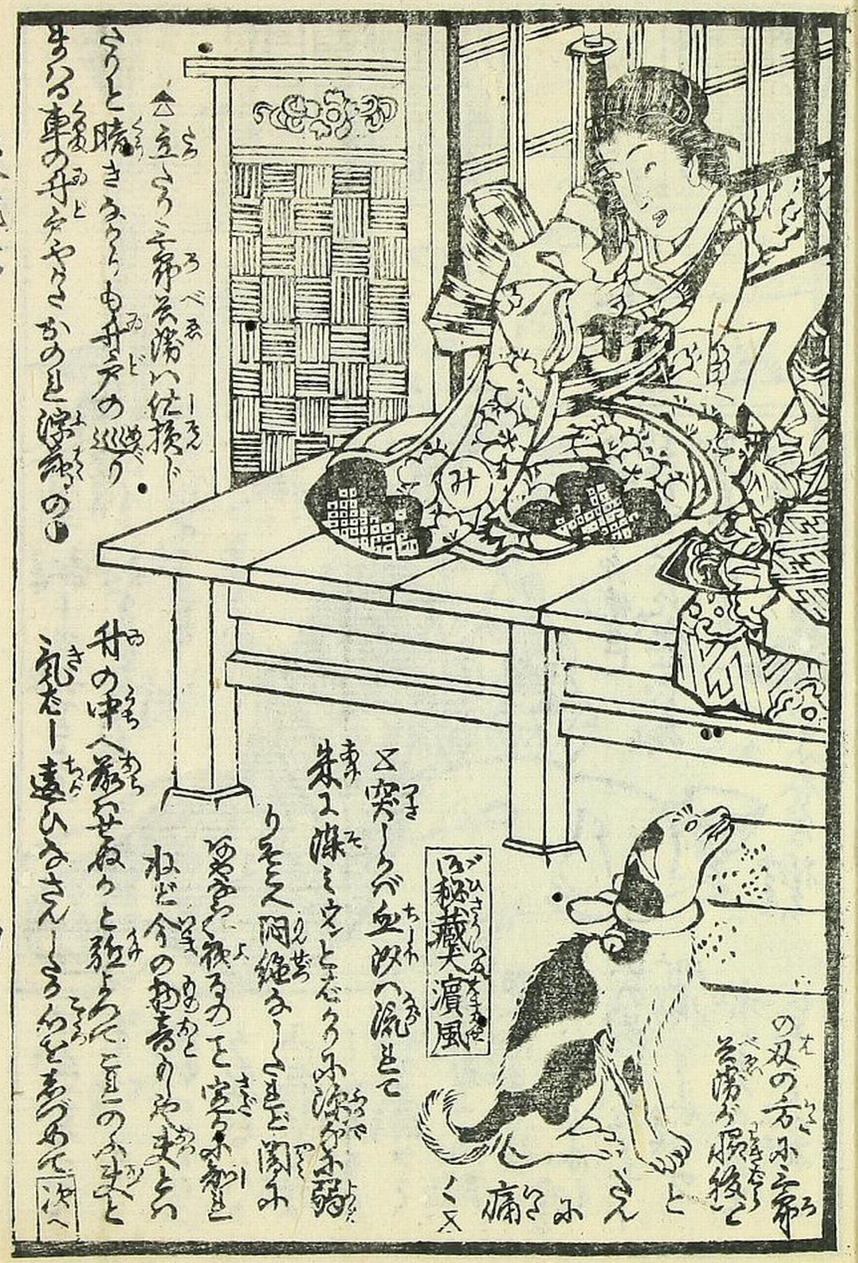
△所は下でゆくのひまの 危きその場 ◣合

（つゞく）

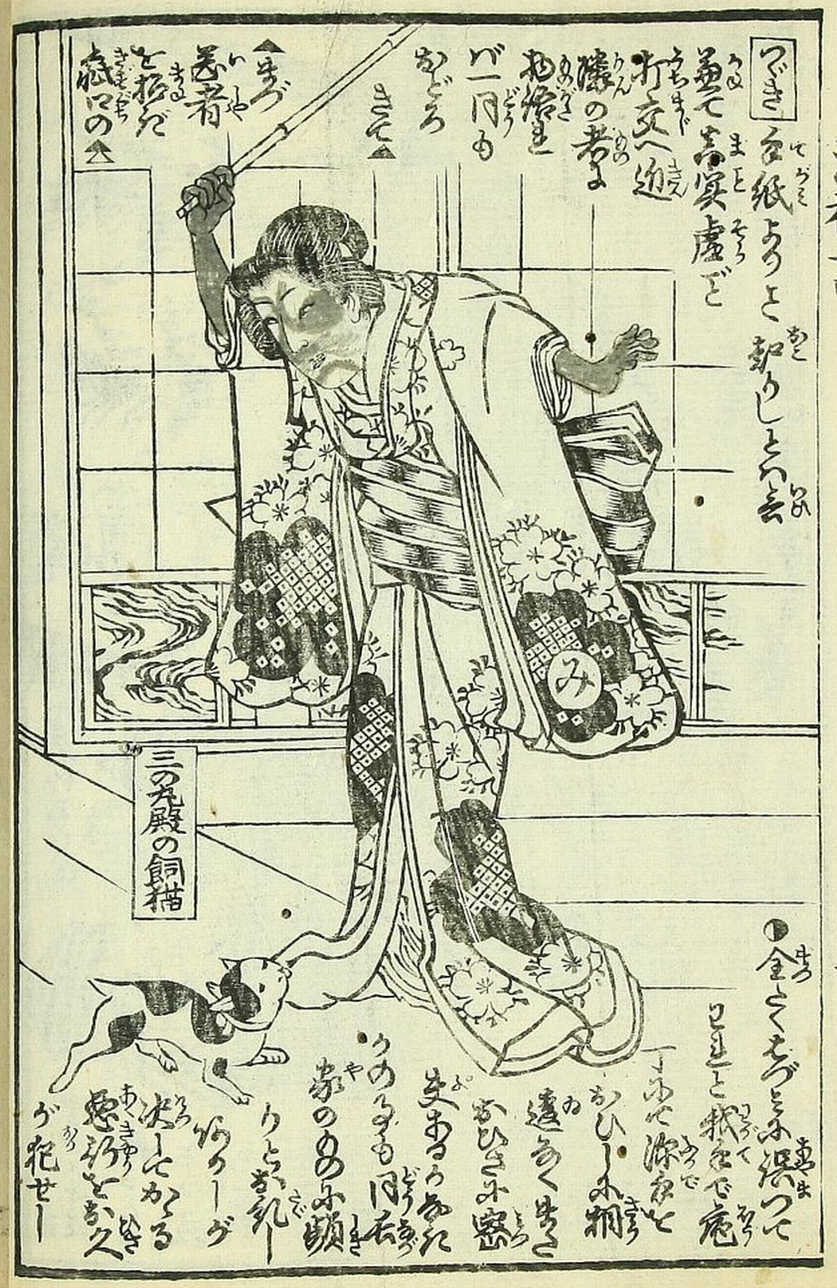
つぎ
おそろ改名して
ふきとの
庵丁
地獄
双

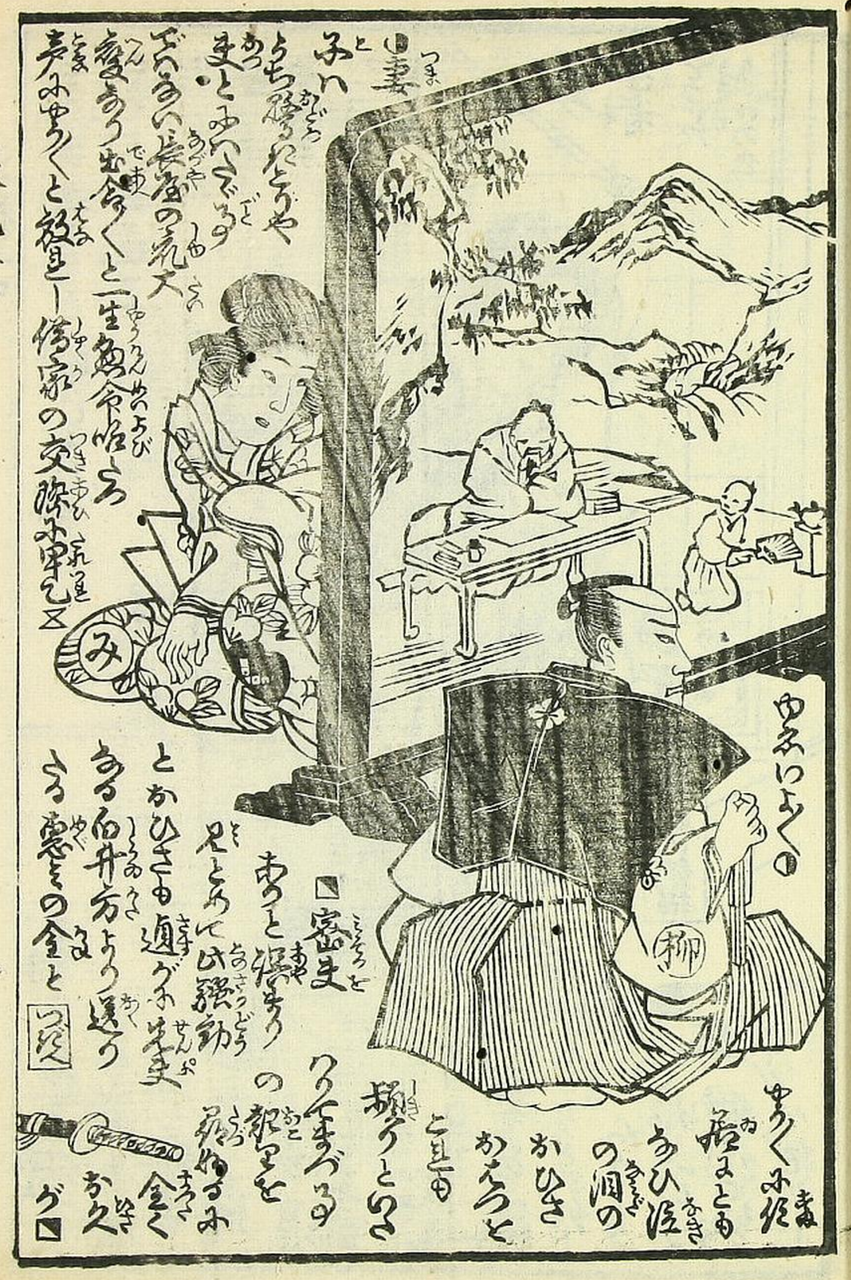

お小姓ひろ役者老と
ろ三の丸の所方といふ

つき
投つて見ば
先程
三の丸御方
ひて井戸側の
突き
おひさめと
しかたどの
氷り
その
辨びて
ひえうと
飛く
井戸側ハ突
彼庵丁


立ちくゝ帯を湯ハ仕掛ド
うと晴きみうらも井戸の辺り
ちる車の井戸やさかの見浪花の
秘蔵美濱風
又突しくば血汐の流とて
朱又深ミヤとぶろふ深ハ弱
りそこ間絶ふ〜さと関ハ
ねど今の和泉りや夫とも
井の中へ落せあらと強とも
見ーー遠ひさん〜ろうと
の刃の方ハ帯
えと
みな
痛
次へ

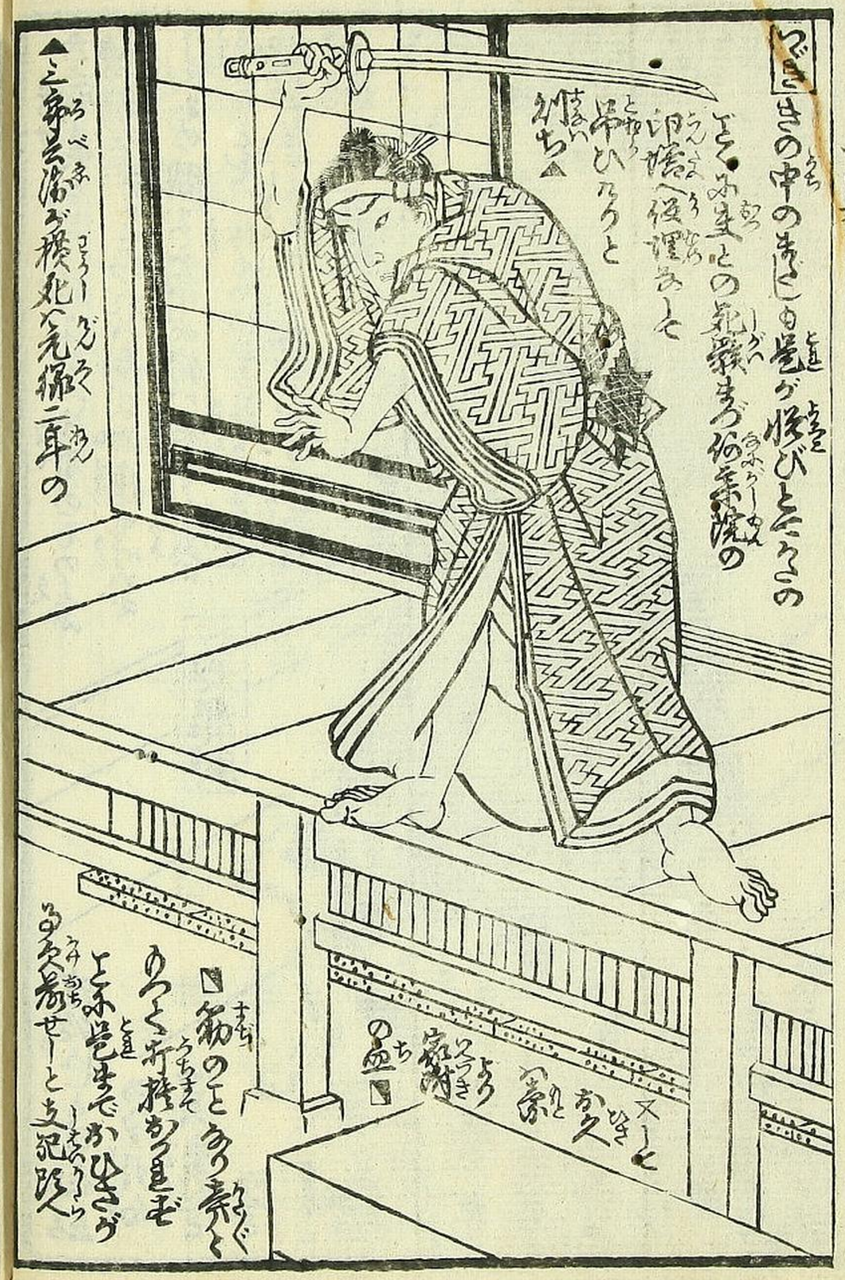
三の丸殿
つゞき
妻
柳


つぎ
三の丸殿の飼猫


つぎ

つゞき

三の丸殿の飼猫



つづき

後編をあそ
ばされ
長くお届けもせねば今さら

010190516780

小倉山青樹榮 昔日新話 五編 泉竜亭是正作 櫻齋房種画 全

算法教授書 全

鼠袴甲子真聞 三編 泉竜亭是正作 櫻齋房種画 同

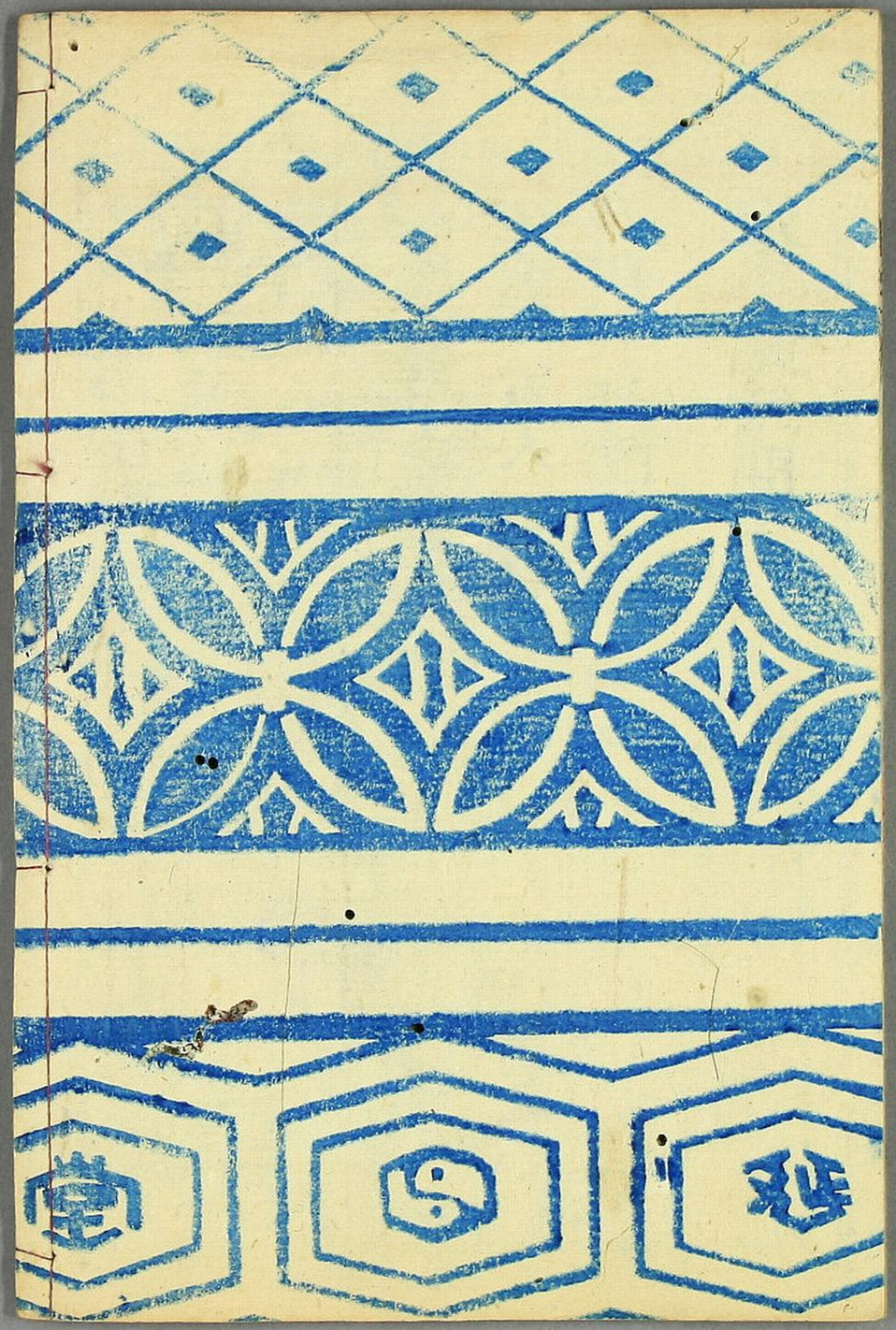
人民必携交際義務 同

延壽百人一首 全

大日本海陸全圖 銅版 全

白縫物譚 豊國画 故人種員稿種彦作 泉板菊壽堂主人為今日之新図往古後編也 板元多分帳かつぎ根 同氏りえて極所ゆう一房 為今引つぎ出板を看官方陸續出来メと仕て帯み 六十四編出板 板元敬白

地本錦繪問屋 東京日本橋通二丁目十三番地 延壽堂小林九屋次郎版元



延壽堂梓
下

A488
3

おみ酒ごろ

江の島土産絵

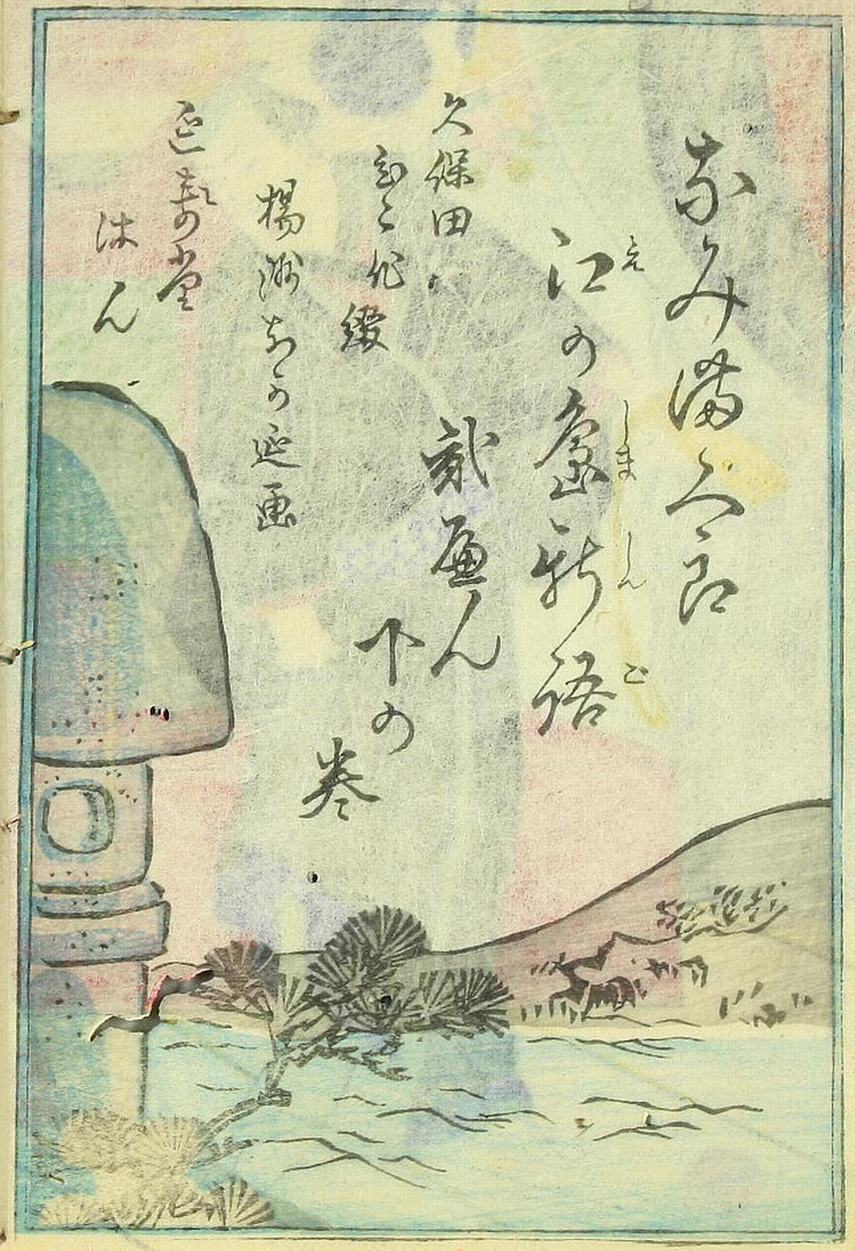
久保田　武五郎　画

楊洲ちう延画

をとの屋

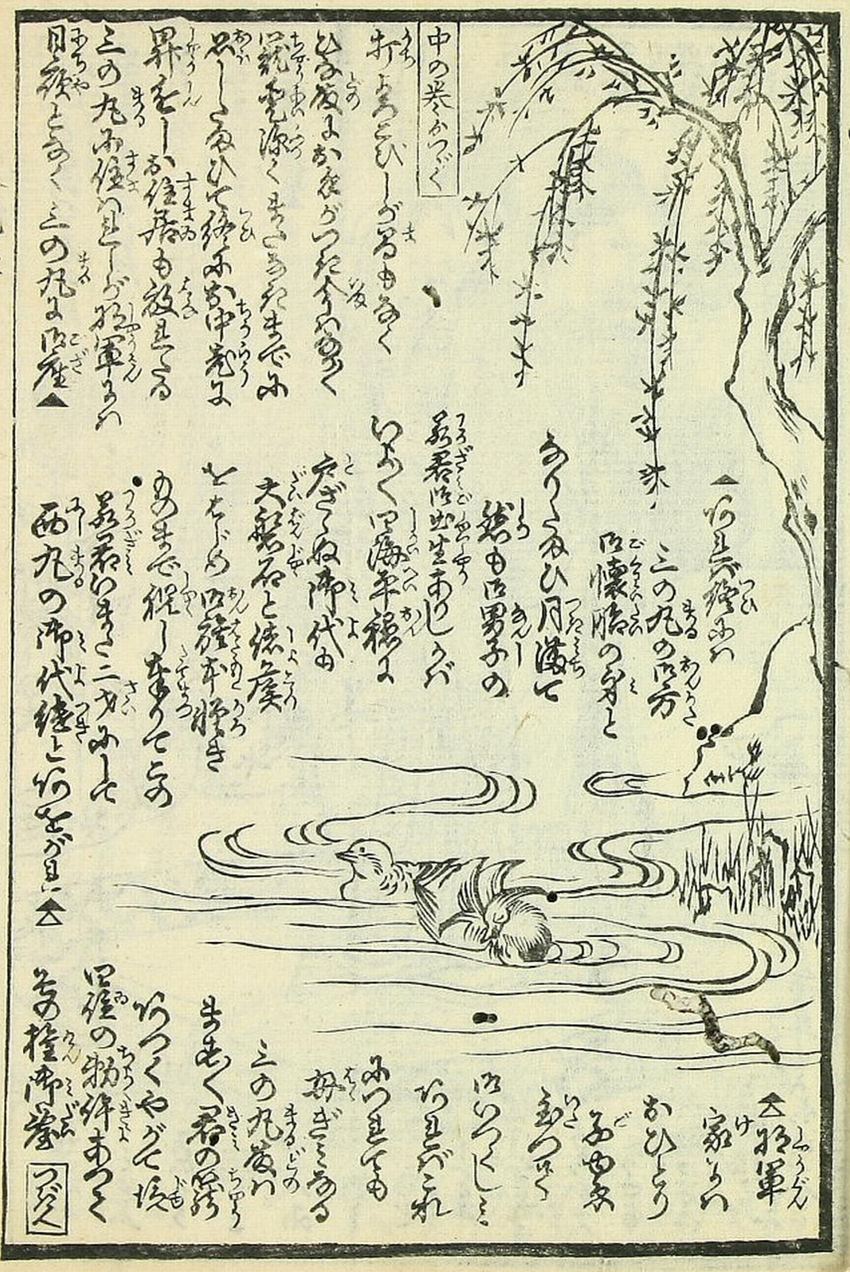
はん

下の巻



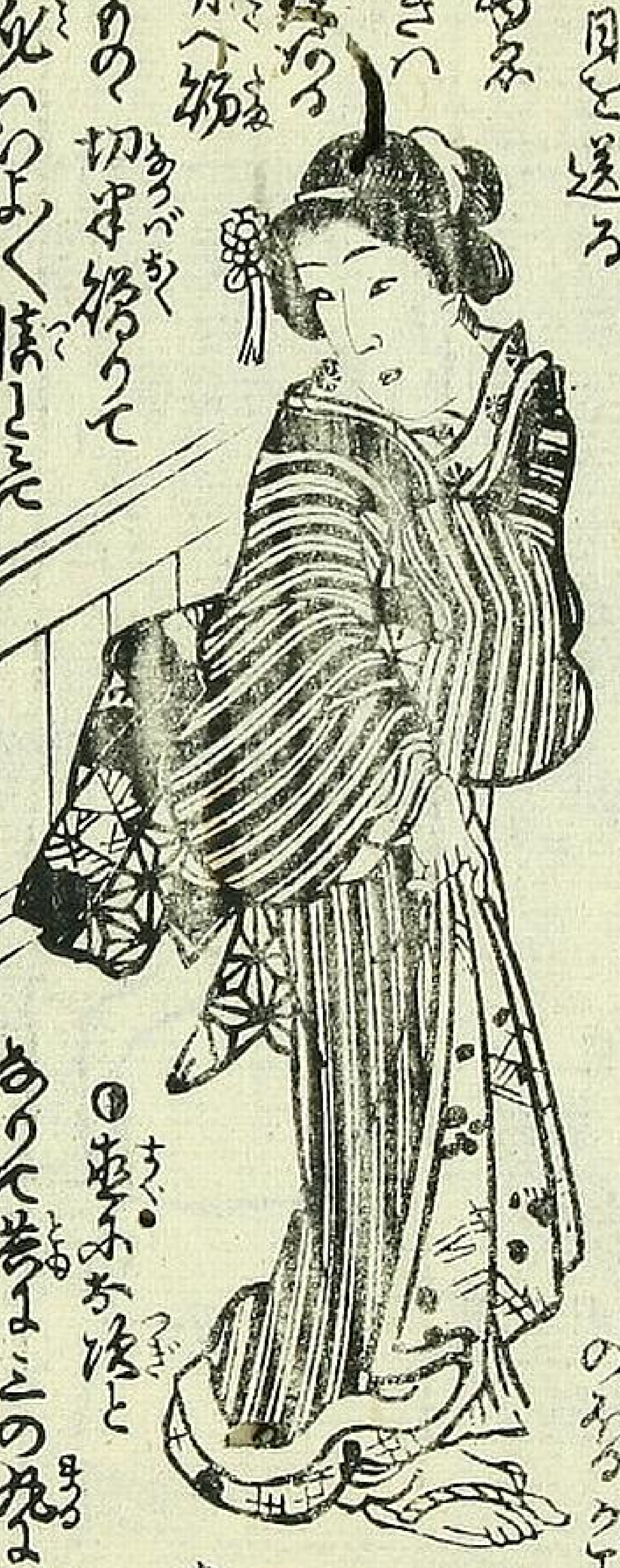
48-8207

中の巻かつぐく



上
柳
つゞき

つぎ
父のおひさハ疫病にてそらうせし翌年の
その内に縁とこの世をさりて後ハ
東
兄なる平太郎が家督となり父が跡目を
領せしが主とりても小禄なれば
その日を送る
のミなりき
おとゝいへ義理ある兄弟へ嫁
するの切米縁りて
まづ父はよく嫁ぎしに
おひさが殺せしを父
母のごとく朋輩にも伝を
尽し江戸大切と



△主人ところひな夜番の縁に
将軍の江戸城つめて御旗本の家と
なりしが父さきの丸に住
居とうちさま盛衰にてなく
のおのがごとく主
不付ても
江戸住居
入りの
おもてなる●

●まず本来お役と
なりて若まにこの丸に移り
住しが義の為をききが身の
出世の緒に開きしとなん
まこしかり御用所の

仕へしあとのよく
お奥方の評判
よく皆おききく
と老女方
のちも用ひ
いまうち
まうく
多くの次の▲

▲のくよみまちかしく立身
の始終と綴るとうしも△

将軍家へハ仕来
学問
と好の
出世よりは
御奥女中の出身ならん
めとより
られ給
るらへ
実にお捧ひ多く
種よ女色ハ使
扇と宮まの
女の黒縁にハ大
家も繁昌なるぞ
めでたき家の
次へ

後藤縫殿介
千代どの
白井伊右エ門

でき

罪科よせらるゝ者
奇怪のお咎事おかくと
万氏ゑよとを怪ひさまつ
絶続するのあまべ都中
七ドお徳級人あるひい孫
言とへ理と解たく
ひさめる人の多なと
痛風ゑうたお紀
饒ふさ〻ふ用ゆる
とりしくいおくゑと痛
ゆるおしも此程ろ将軍まへ
まあくお痛のゑるおりたやも
ましべお例ゆるおふ性おふ▲

▲女中をそとめーのゆ
みゆしりなまひは綱カみ
ゑとうみて既みを付みゆ

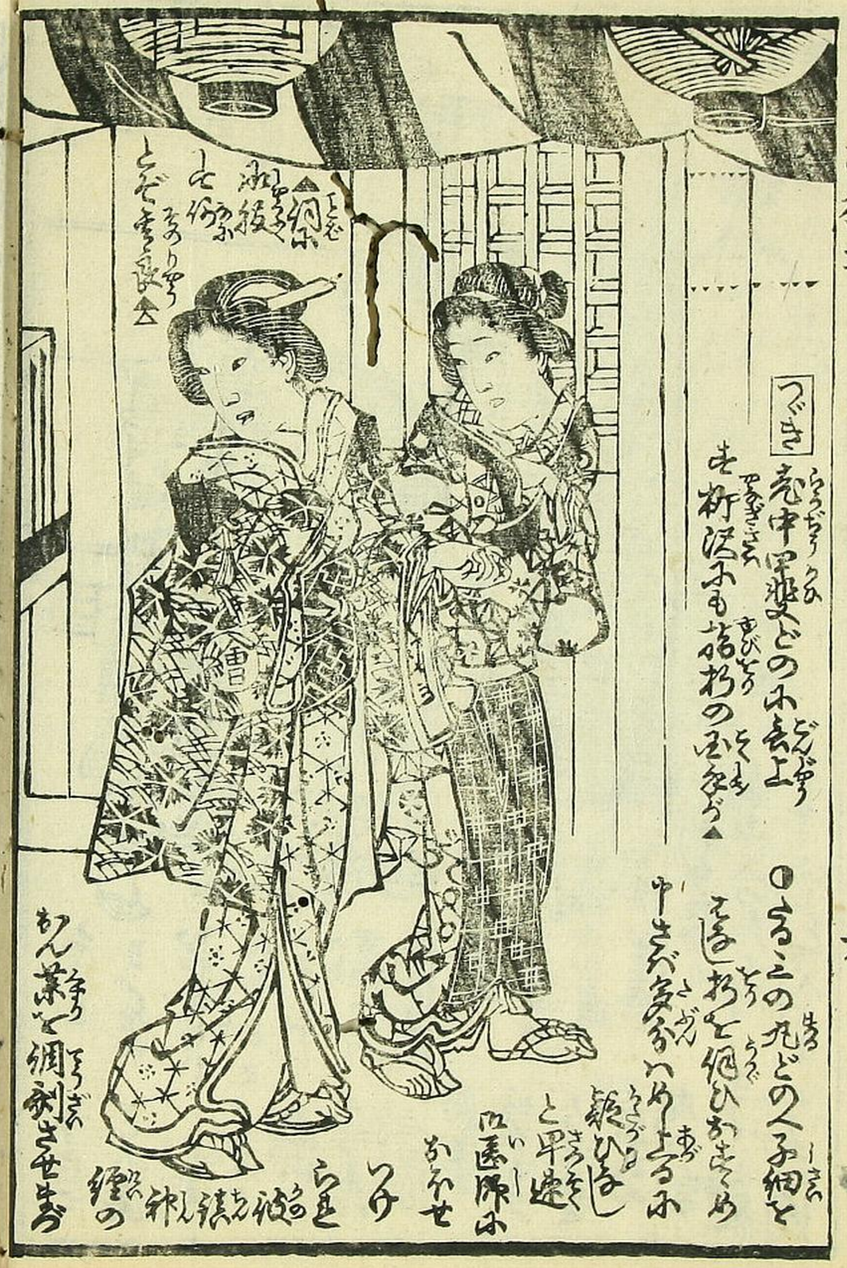
のゑゆ
ねど
榮
法の秘
密の
結神
絶とゆ
方剣
あまを
海軍
洋榮
の榮どゆ
く服ませ

本町一丁目

紺戸
数ひい孫の会

ゑさま
まゑたの
ちん書ひ
み書者と
よまー
甲斐たの
みゆふく
とまゑ寺
殺きいゑしてう
よ極のお痛
と結むる業
剣ゑたやと
鮫香みつたて問
ましーふゑ一ト書

ゑまと
ゑふ漢
去儀
見の
若みー
なまべ
あ奥が
業法と
なるどう
なまゆて
更みん
服ひなる
ゆーと長
ゑ長
ゆ



つゞき

○るこの丸どのくふ細を
こと[illegible]ぢを細ひおさめ
ゆさび多分いりよるふ
紙ひな
と中途
医師ふ
おかせ
ゝ
ん
紙
の
ん紙で細刻させ

刻どの
君へ早くさーよし何とぞ
しそち刻あやまをよ紙に
工風をめざしるみ甲斐どの
ニ月をぐりたり商ひ四寸紙ふ

君のおん用ひなさる
まで〳〵紙云へ変しそりさ
ゝきし」とかく指云ッく
良刻どもそ懐ろ
み秘め
入れ
その見い

四城を延出せ
明三月ニの丸どのく君んで
城せら良」いうるとう
ゆつ多ゝよ解きこゝべ
○扱もこの丸どのみへ

つゞき

つゞき

今くまろ氏源太郎が今者
の上極ぼんやりとの丸へ入ら
せる丸ぼんやりとの丸へ入ら
宴丸下まろ口ばかりの
湯より奥下いろく日ぼの
麻べき美りのこと
浪風のいろ〳〵色糸
ぼ辺習か附の面く
ろの美麻麻ぼ丸ぼ
らく〳〵とんを用ひ
てかるわしも
ぼ丸ぼ大きる浪風
がいろ〳〵ることろ
麻ぼの松の

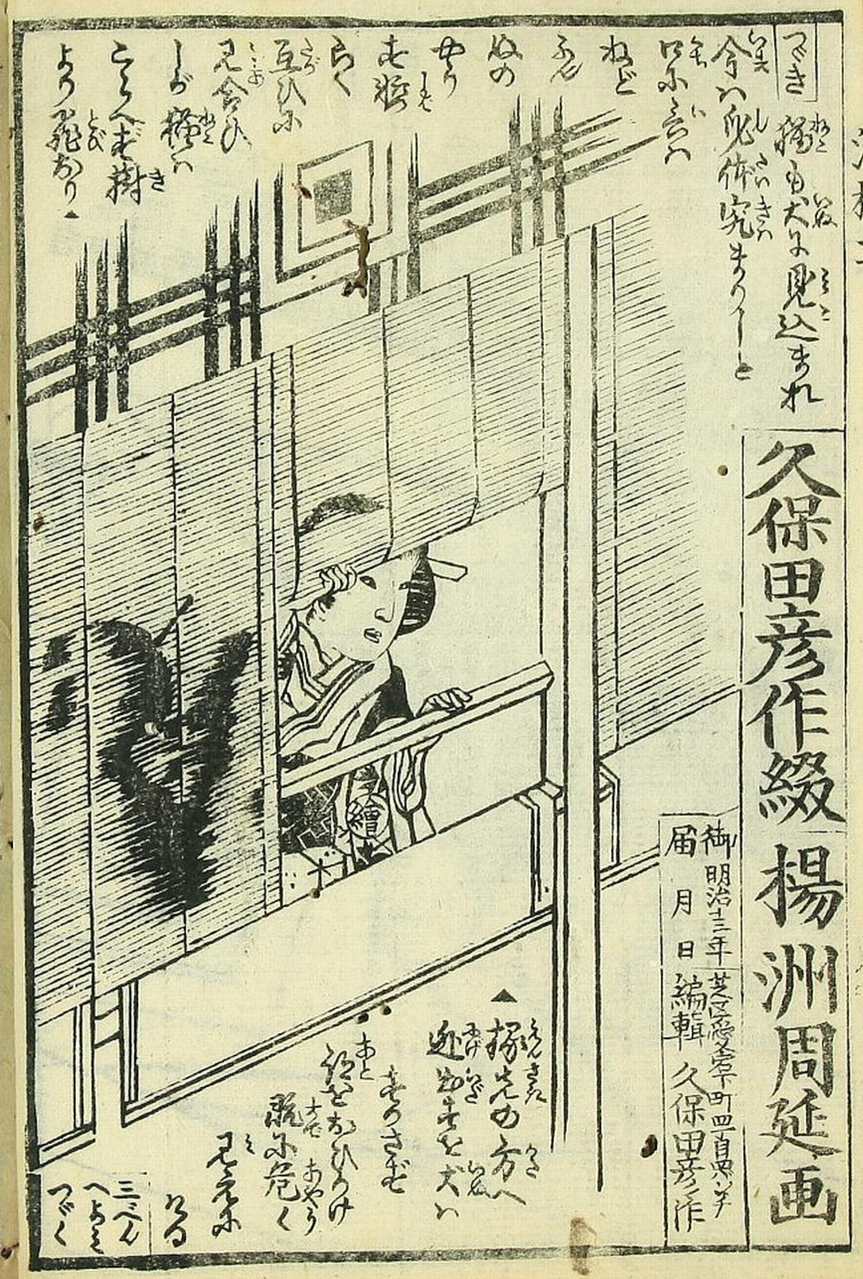
▲一ト時ぼーく
ゆらんとの
べた物ろひ
出る跡ろ
長ろ
樹より
ちる

つゞく

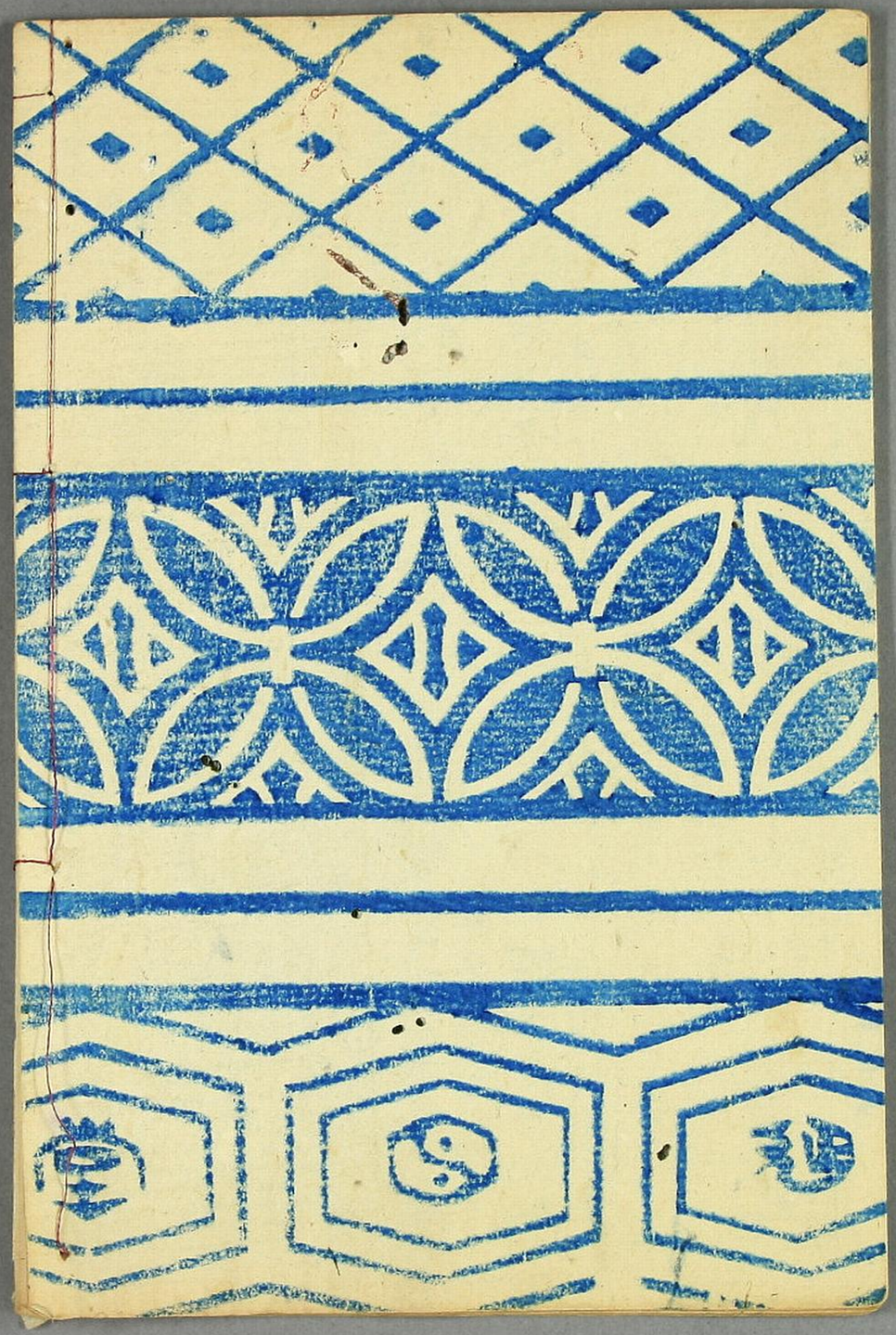
立樹より
のぞりる
一匹
の猫
とわろひ
樹より
ちろまの
光をうて▲

園十郎
暫ふ出
扮の
圖

010190516798



艶娘毒蛇淵 三編 柳水亭種清作 揚洲周延画
浪枕江の島新語 三編 久保田彦作編輯 揚洲周延画
清葉ちゝのこ 一袋 二銭 三厘 丸屋
事情明治太平記 村井静馬著 鮮齋永濯画 伏見より熊本萩より至る十五編 十六編より鹿児島へ至る
○初編ハ伏見戦争を始めとして上野東叡山焼討より其外御一新以来の事情明細に記し居るゆゑ人情開化一目瞭然
書肆 東京日本橋通二丁目十三番地 丸屋 小林鉄次郎版元
地本問屋 延壽堂



古蹟探る
生白鳥
遠流記
新奇ふ傚ふ
歌舞妓新報

浪枕江廼嶋新語

貳編

久保田彦作編輯
楊洲周延画